

# 神崎遺跡

—福岡県田川郡金田町大字神崎所在遺跡の調査—

金田町文化財調査報告書  
第1集



神崎1号噴出土  
獅噉環柄頭  
(九州歴史資料館所蔵)

1994

金田町教育委員会

# 序

この報告書は、平成4年度、5年度の2カ年にわたって、畠地造成に伴い発掘調査した「神崎遺跡」の記録を、「金田町文化財調査報告書」第1集として取りまとめたものです。

金田町は、町内を貫流する彦山川周辺に広がる田園地帯には、中世の「金田庄」、そして弥生時代の集落及び墓地群、さらにはその両岸の丘陵には古墳時代の古墳群、横穴群が展開しており、先人達の営みが続けられてきました。今もなお町内各所にこれらの先人達の遺跡が数多く点在することは、まさにその証なのです。

今回の発掘調査をとおして、幾年月かの長い間地中に眠っていた先人達の息吹にふれることができました。

この報告書が、郷土の歴史の解明に少しでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、この調査に終始協力を惜しまなかった地権者である若林佐久馬氏及び調査作業員の方々には心より感謝いたします。

平成6年3月31日

福岡県田川郡金田町教育委員会

教育長 田 中 貴美男

# 例　　言

- 1 本書は、畠地造成に伴い実施した緊急発掘調査の報告書です。
- 2 調査は、金田町が国・県の補助金を受け、福岡県教育庁筑豊教育事務所の協力を得て実施しました。
- 3 遺構等の実測・製図、写真撮影は、岩熊真実の協力を得て、緒方泉が行い、気球写真は、(株)写測エンジニアリングに委託しました。
- 4 本書の執筆は、岩熊、緒方が行い、編集は緒方があたりました。

## 本文目次

第1章　　はじめに .....	1	第2節　弥生時代の遺構と遺物 .....	5
第1節　調査の経過と調査組織 .....	1	1 貯蔵穴 .....	5
1 調査の経過 .....	1	2 ピット .....	17
2 調査の組織 .....	2	第3節　古墳時代の遺構と遺物 .....	17
第2節　遺跡の位置と環境 .....	2	1 石棺墓 .....	17
		2 ピット .....	19
第2章　　遺構と遺物 .....	5	第3章　　まとめ .....	20
第1節　はじめに .....	5		

## 図版目次

- 図版 1 1. 神崎遺跡全景  
2. 神崎遺跡全景
- 図版 2 1. 香春岳を望む  
2. 金田町を望む
- 図版 3 1. 調査前の神崎遺跡  
2. 調査前の神崎遺跡
- 図版 4 1. 調査後の神崎遺跡  
2. 調査後の神崎遺跡
- 図版 5 1. 調査後の神崎遺跡  
2. 1号貯蔵穴
- 図版 6 1. 2~3号、6号貯蔵穴  
2. 4号貯蔵穴
- 図版 7 1. 2号石棺墓  
2. 作業に参加したみなさん

## 挿図目次

- 第1図 神崎遺跡と周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000) ……3
- 第2図 神崎遺跡遺構配置図 (S=1/200) ………………4
- 第3図 1~2号、4号、7~8号貯蔵穴実測図 (S=1/60) ……6
- 第4図 1号貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4) ……………7
- 第5図 1号貯蔵穴出土石器実測図 (S=1/2) ……………8
- 第6図 2号貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4) ……………10
- 第7図 2号貯蔵穴出土石器実測図 (S=1/2) ……………11
- 第8図 3~4、7号貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4) ……13
- 第9図 3~4号貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/2) ……14
- 第10図 3、6号貯蔵穴実測図 (S=1/60) ………………15
- 第11図 5号貯蔵穴出土石器実測図 (S=1/2) ……………16
- 第12図 2号石棺墓実測図 (S=1/20) ………………18
- 第13図 表採資料実測図 (S=1/4) ………………19

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経過と調査組織

### 1. 調査の経過

神崎遺跡は福岡県田川郡金田町大字神崎に所在する遺跡です。

神崎遺跡の調査は、平成4年度の第1次、5年度の第2次の2カ年で、個人畠地造成に伴う事前発掘調査として実施したものです。

調査に至るには、次のような経過がありました。平成4年1月、町教育委員会より町内の神崎で、土地造成を行っていたところ、石棺墓のような大きな板石が出てきたという通報が筑豊教育事務所にありました。教育事務所社会教育課文化財担当職員はすぐに現地立会いを行ったところ、長さ 2.3m、幅0.4m程の石棺墓であり、蓋石も周辺に散乱していることを確認しました。そこで、教育事務所は、町教育委員会、地権者の間で今後の協議を行い、工事は一時中断して、発掘調査を実施することとしました。

これを受けて、調査主体の金田町は、本調査を平成4年度の国及び県の補助事業で行うこととしました。

調査は金田町が主体となり、発掘調査担当は、町に文化財専門職員が配置されていないことから、町からの派遣申請により筑豊教育事務所社会教育課文化財担当職員があたることとしました。

平成4年度に入り、筑豊教育事務所社会教育課では、文化財担当職員の異動があり、調査は10月14日から11月27日まで実施しました。調査の結果、石棺墓2基、貯蔵穴8基、ピットを検出し、さらに今回調査対象とならなかった南側へも遺構が展開することを確認しました。

金田町では、まちづくり事業を行政と地域住民が一体となり行っており、平成4年度からは、街巡りの看板や各所の文化財解説板設置事業が実施され、また、町西側の日王山周辺には生活体験施設「ふれあい塾」建設や国際車イステニス会場となる「テニスコート」など社会教育施設や体育施設、さらには、日王山を巡る歴史遊歩道などが整備されつつあります。

平成5年度も引き続き、町からの派遣申請により筑豊教育事務所生涯学習課（平成5年度より社会教育課が生涯学習課に名称変更しています）文化財担当職員が、南側に展開する遺構の調査を継続事業としてあたり、10月9日から11月25日まで実施しました。その結果、貯蔵穴3基、溝2条、ピットを検出しました。

従って、平成4年度、5年度で検出した遺構は、石棺墓2基、貯蔵穴10基、溝2条、ピット多数ということになりました。

## 2. 調査の組織

調査の組織は、以下のとおりである。

調査主体 金田町教育委員会

総括 教育長 田中 貴美男

社会教育課長 辰島 一朗

庶務 社会教育係長 若林 良明（前任） 田中 敏明

調査担当 福岡県教育庁筑豊教育事務所生涯学習課

主任技師 緒方 泉

その他、筑豊教育事務所原正所長（平成4年度）、近藤義隆所長（平成5年度）、正平辰男生涯学習課長及び生涯学習課員の諸氏から多大な御配慮をいただきました。さらに、地権者である若林佐久馬氏から種々の御協力を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

また、発掘調査にあたっては、地元の方々の御協力を受け、事故もなく無事に調査を遂行することができました。ここに記して感謝の意を表します。

## 第2節 遺跡の位置と環境（第1図）

神崎遺跡は、金田町を貫流する中元寺川（遠賀川支流）に注ぐ<sup>なきり</sup>泌川の左岸へ、舌状に突き出した丘陵上（標高約28m）に位置しています。前方には田園地帯を望み、さらに遠く、福智山、香春岳を見ることが出来ます。

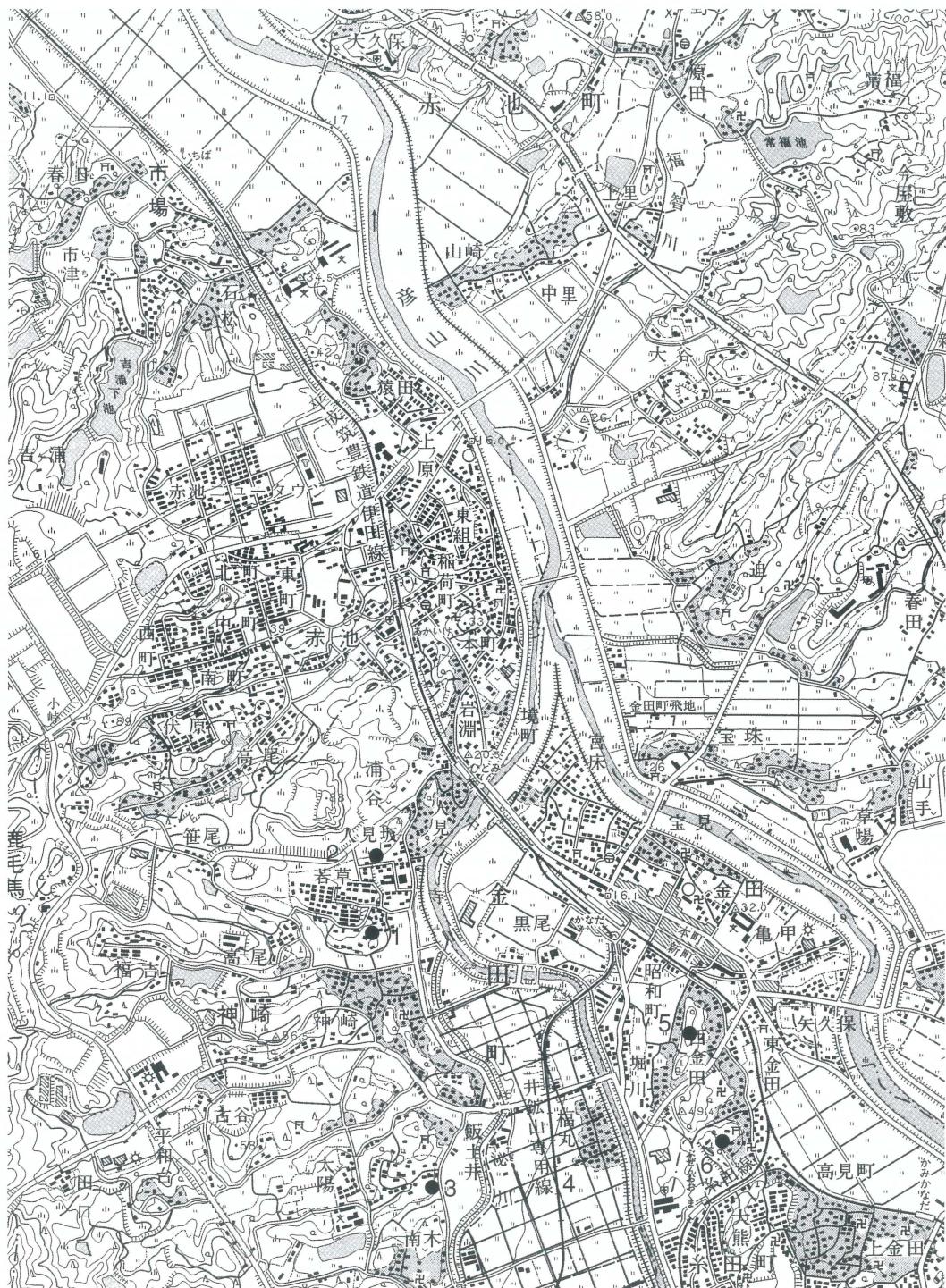
金田町は、福岡県の中央部、田川盆地の北側にあります。東は、彦山川を隔てて方城町に接し、西は嘉穂郡穎田町、南は糸田町及び田川市、さらに北は赤池町と隣接しています。

当町は、1889（明治22）年の町村制施行で金田村と神崎村が合併し、神田村となりました。1916（大正5）年7月28日町制をしき、神田村を金田町に改称しました。

遠賀川の支流である中元寺川と彦山川の合流部に位置する当町は、古第三紀層の丘陵が広く分布し、神崎遺跡もこの丘陵上にあります。

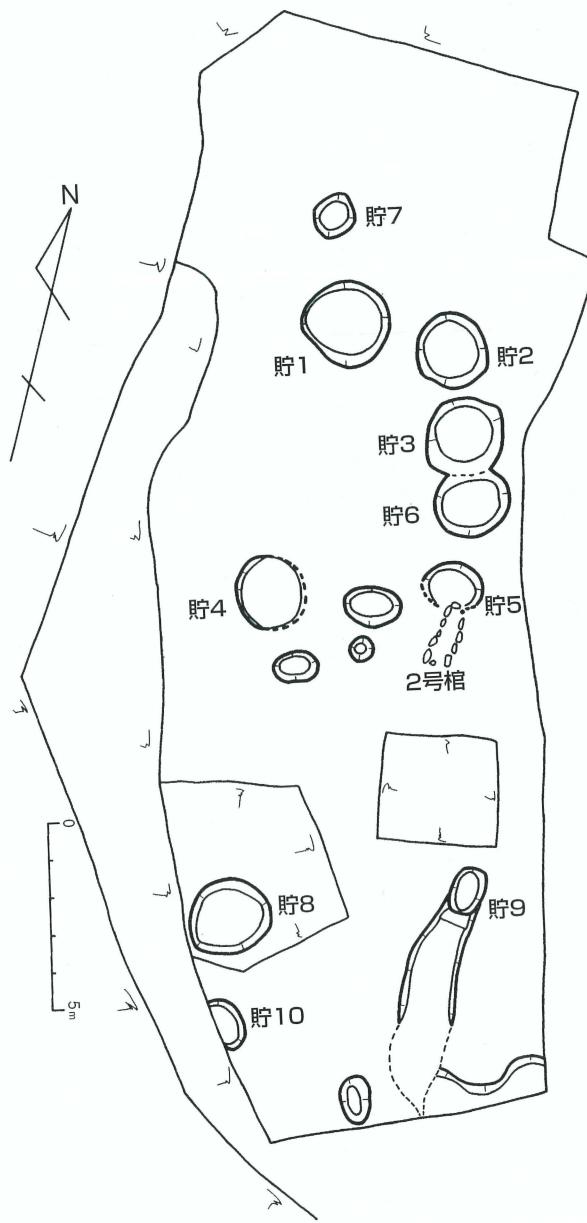
遺跡の周辺は、町営住宅建設に際して、多数の石棺が見つかったと言われています。また、北側の丘陵では、しがみ環頭太刀（裏表紙）が出土した古墳（神崎1号墳、九州歴史資料館所蔵）があったと言われています。さらに、田園地帯には、条里制が部分的に確認され、中世の「金田庄」の実態解明が急がれます。

今回の調査は、金田町で初めて実施される発掘調査であるため、これからさらに金田町の歴史が解明されていく手がかりを得たことになると思われます。



第1図 神崎遺跡と周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

1 神崎遺跡 2 人見古墳群 3 飯土井古墳 4 神崎条里跡 5 城山古墳群 6 玉穂山古墳



第2図 神崎遺跡遺構配置図 ( $S=1/200$ )

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 はじめに

調査区内からは、貯蔵穴10基と石棺墓2基及びピットなどを検出しました。それらは、古第三紀層を地山にした層で検出することができました。(第2図)

### 第2節 弥生時代の遺構と遺物

#### 1 貯蔵穴

##### 1号貯蔵穴 (図版5、第3図)

1号貯蔵穴は、調査区北側に位置し、北側に7号貯蔵穴、東側に2号貯蔵穴があります。

この遺構の床面は略円形を呈し、東側で床面から内傾して立ち上がり、さらに直立して上面に達します。大きさは上面で径1.88m、深さ1.12m、床面で長軸2.2m、短軸1.96mを測ります。

##### 出土土器 (第4図)

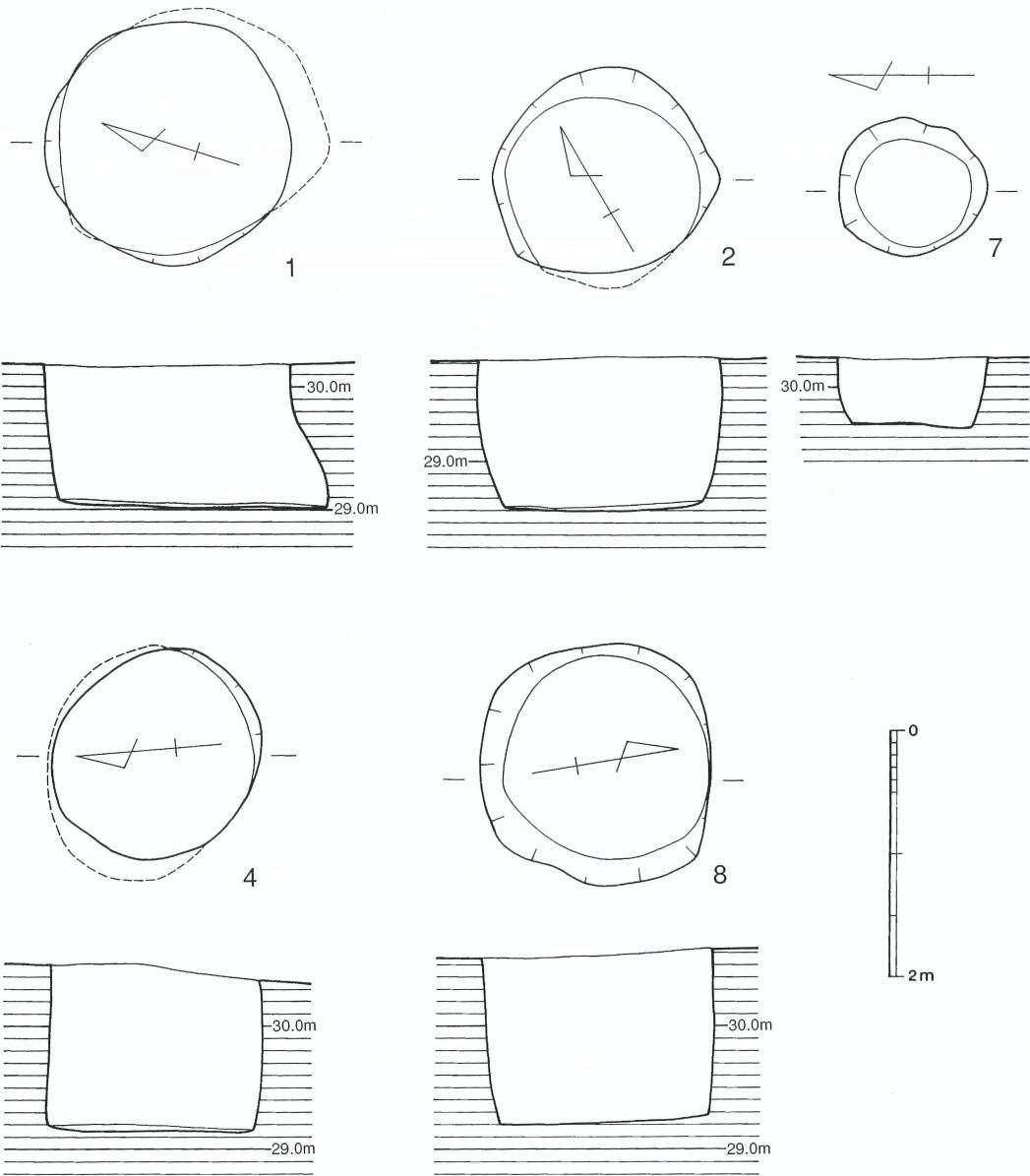
甕 (1) 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で、調整手法は外面は剥落が著しいため不明ですが、内面は丁寧なナデ仕上げになっています。胎土は長石・石英の砂粒を多く含み、色調は茶褐色を呈します。

甕 (2) 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で、調整手法は外面は磨滅のために不明ですが、口縁端部から下はヨコナデ、胴部は刷毛目調整されていると思われ、内面は丁寧なナデ仕上げになっています。胎土は長石・石英・金雲母を含み、色調は茶褐色を呈します。

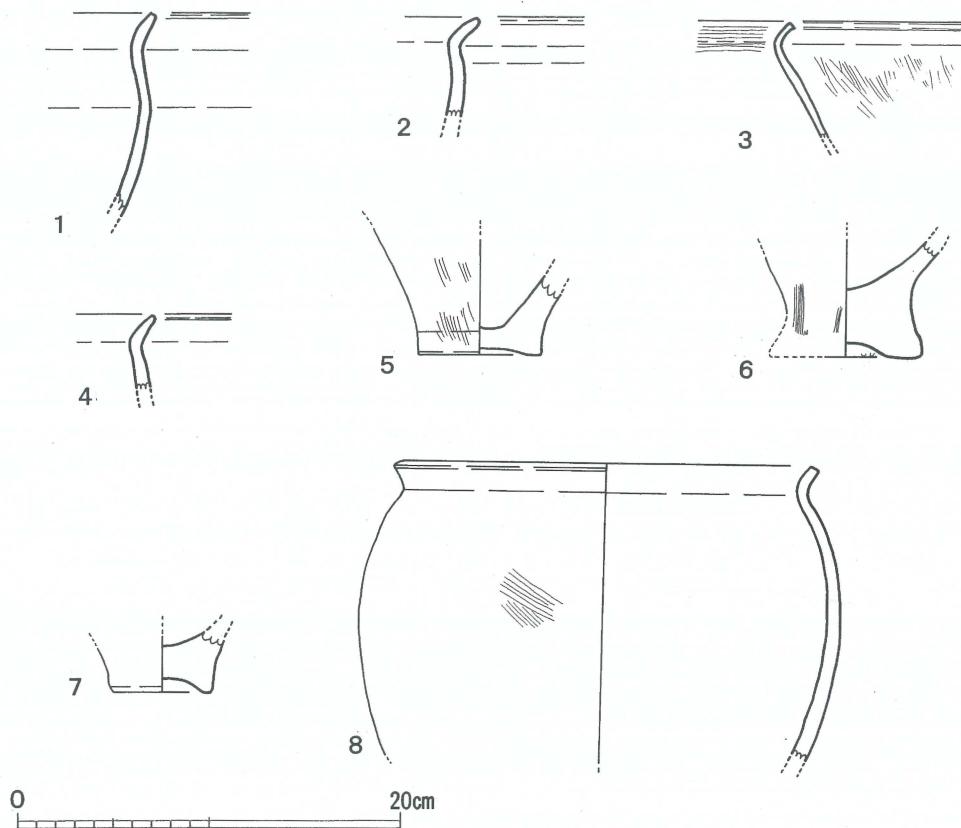
壺 (3) 壺口縁部の小破片です。口縁部は強く外側に外反し、口縁端部が面になっています。調整手法は外面は口縁端部から下はヨコナデ、胴部はやや複雑な刷毛目調整で4本単位で施されています。内面は口縁端部から幅3mmのヘラ状工具によって横方向に調整痕が残り、14mmの幅に5本施され、表面がとても緻密になっています。胎土は長石・石英・金雲母を含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好です。

甕 (4) 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で、調整手法は外面は剥落のため不明ですが、刷毛目調整が施されていたと思われます。内面は丁寧なナデ調整になっています。胎土は長石・石英・金雲母を含み、色調は茶褐色を呈します。

甕 (5) 甕底部です。底部は少し凹み、調整手法は外面には、強い刷毛目調整が15本/25mm施され、刷毛目は底部端部まで達しています。内面には丹塗りがみられます。底径は6.5cmを測り、胎土は1mm大の長石の砂粒を多く含みます。色調は外面が橙色、内面が赤褐色を呈します。焼成は良好です。



第3図 1~2号、4号、7~8号貯蔵穴実測図 (S=1/60)

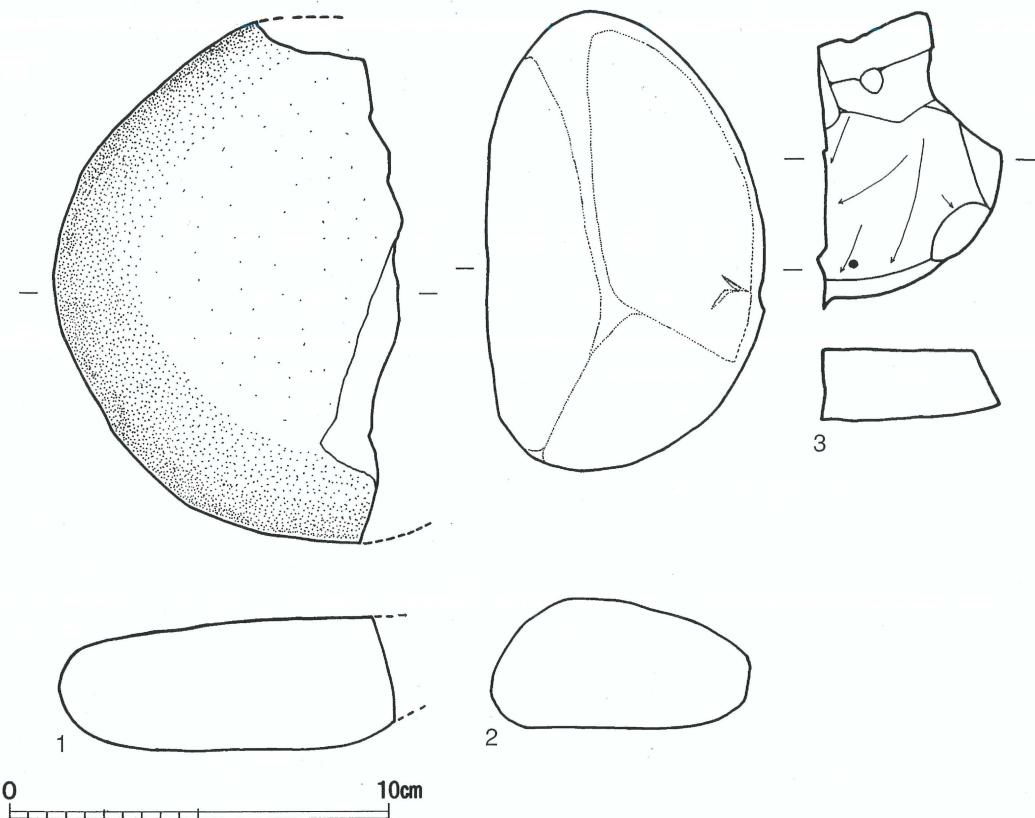


第4図 1号貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4)

甕 (6) 約1/2残す甕底部の断片です。底部は直径4cmで凹みがあり、肉厚の高台状になっています。調整手法は、外面に刷毛目が18本/30mmで施されています。復元底径は7.7cmを測り、胎土は1mm~2mm大の長石・石英の砂粒を多く含み、色調は橙色を呈します。

甕 (7) 甕底部です。底部は凹み、脚台状になっています。調整手法は剥落が著しく不明です。底径は5cmを測り、胎土は1mm~2mm大の長石・石英の砂粒を多く含みます。色調は茶褐色を呈します。

甕 (8) 甕口縁部です。約1/4の口縁部破片です。如意形口縁で、調整手法は口縁端から下がヨコナデで胴部に刷毛目が一部残っており、5本/10mmの刷毛目が施されています。復元口径は21.2cmを測り、胎土は長石の砂粒を含み、色調は赤褐色を呈します。



第5図 1号貯蔵穴出土石器実測図 (S=1/2)

#### 出土石器 (第5図)

すり石 (1) やや軟質の粘板岩で1/2を欠いています。円礫平坦面と周縁部に磨耗痕がみられ、主にすり石として機能したと考えられます。最大長13.6cm、最大幅8.9cm、厚さ3.5cm、現存重量400グラムを測ります。

すり石 (2) 多孔質の安山岩で、全体的に磨耗痕がみられ、手に納まりやすい形になっています。下部に若干敲打痕がみられ、すり石の他に敲く機能もあったと考えられます。最大長12.4cm、最大幅7.2cm、厚さ3.4cm、現存重量500グラムを測ります。

砥石 (3) 砥石の破片資料です。硬質砂岩できめが細かく精緻であったと思われます。図示した面が砥研の痕跡を顕著に有し、他にも側面1面だけ若干砥研の痕を残しています。最大長4.5cm、最大幅4.2cm、厚さ1.9cm、現存重量90グラムを測ります。

## 2号貯蔵穴（図版6、第3図）

2号貯蔵穴は、調査区北側に位置し、西側に1号貯蔵穴、南側に3号貯蔵穴があります。この遺構の床面は略円形を呈し、床面から緩やかに外傾して立ち上がり、上面に達します。

大きさは上面で径1.94m、深さ1.66m、床面で長軸1.54m、短軸1.52mを測ります。

### 出土土器（第6図）

甕（9） 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で口縁端部に刻目が施されています。調整手法は、口縁部から下はヨコナデ、胴部は10本/10mmの刷毛目調整が施されており、刷毛目が施された後に2条の沈線を廻らせてています。内面は、丁寧なナデを施されています。胎土は石英・長石の砂粒を含み、色調は、外面茶褐色、内面黄白色を呈します。

甕（10） 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で、口縁端部に刻目が施されています。調整手法は、口縁端部からヨコナデで、胴部には8本/6mmの刷毛目が施しており、刷毛目調整されたのちに、2条の沈線を廻らせてています。胎土は石英・長石の砂粒を多少含み、色調は外面茶褐色、内面黄白色を呈します。

甕（11） 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で口縁部に刻目が施されています。調整手法は、口縁部から、下はヨコナデ、胴部には7本/10mmの刷毛目調整が施され、刷毛目調整されたのちに、2条の沈線を廻らしています。胎土は石英・長石を多く含み、色調は外面茶褐色、内面黄白色を呈します。

甕（12） 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で口縁部に刻目が施されています。調整手法は、口縁部から下はヨコナデ、その下に1条の沈線を廻らし、胴部には10本/12mmの刷毛目調整が施されています。胎土は石英・長石の砂粒を多少含み、色調は、外面灰白色、内面黄白色を呈します。

壺（13） 壺口縁の小破片です。口縁部は強く外反し、口縁端部は面をもちます。調整手法は口縁端部から下はヨコナデ、3本/6mmの刷毛目が施されています。内面は丁寧なナデ調整、胎土は長石の砂粒を多少含み、色調は赤褐色を呈します。焼成は良好です。

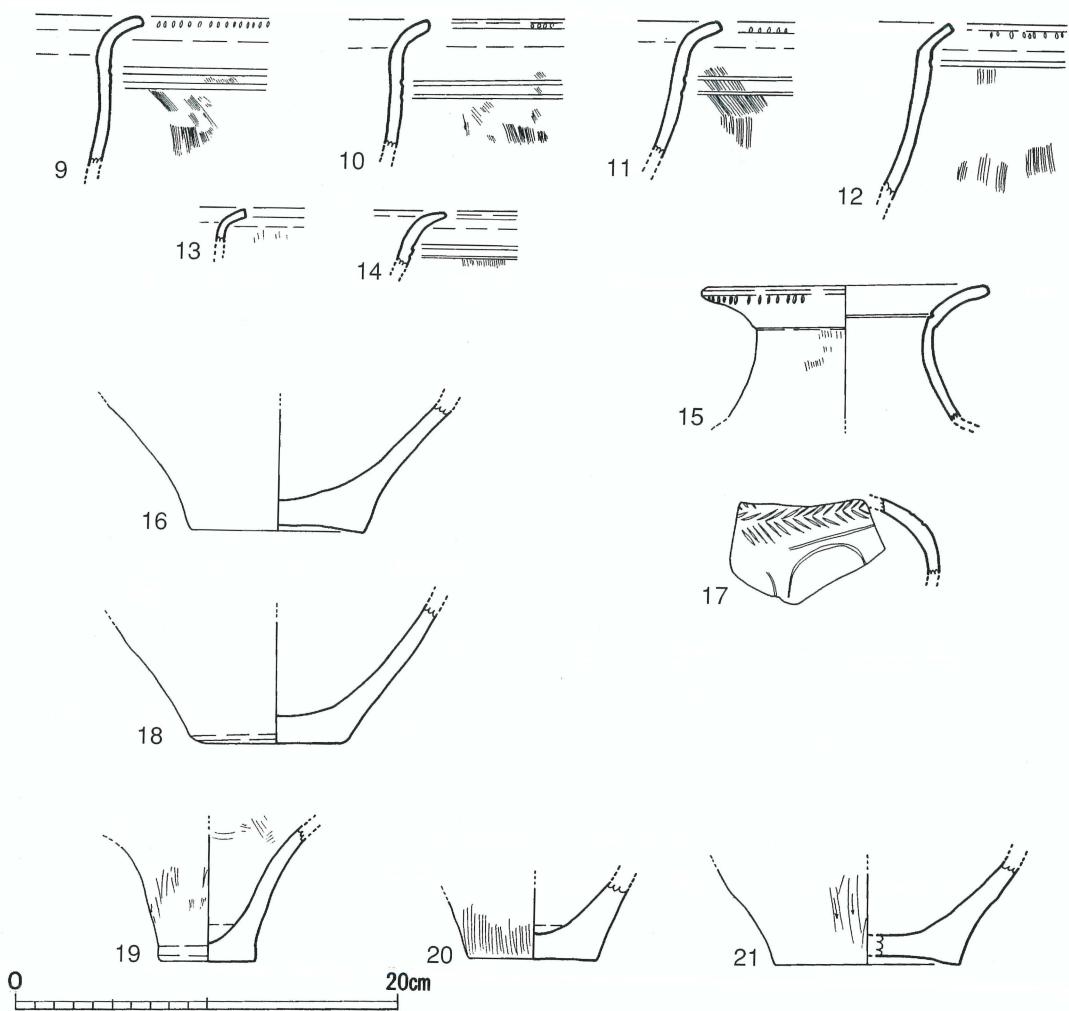
甕（14） 甕口縁部の小破片です。如意形口縁で、調整手法は口縁端部から下がヨコナデで、その下に2条の沈線が入ります。2条の沈線の下には8本/10mmの刷毛目調整が施されています。胎土はあまり砂粒を含まず緻密で、色調は外面茶褐色、内面は黄白色を呈する。焼成は良好です。

壺（15） 壺口縁部です。約1/3の口縁部破片です。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く、刻目を施します。調整手法は、口縁端部から下はヨコナデで、口縁端部から下2.2cmの所に稜が廻り、その下は8本/10mmの刷毛目調整が施されたのち、丹塗り磨研によってナデ消してある。内面も丹塗り磨研が施されており、口縁端部から3cm下の所にとてもシャープな沈線が廻らされています。復元口径は14.5cmを測り、胎土は長石の砂粒を含み、色調は赤褐

色を呈し、焼成は良好です。

壺 (16) 約1/2 残る壺底部断片です。底部はやや凹んでいます。調整手法は、刷毛目により調整されたのちに、ナデ消したものと思われ、一ヶ所底部端部に 5 本/10mm の刷毛目が残ります。復元底径は 9 cm を測り、胎土は長石の砂粒を含み、色調は橙色を呈し、焼成は良好です。

壺 (17) 壺肩部の小破片です。上から下、下から上へと斜線を交互に左から右へと施され



第6図 2号貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4)

た矢羽状の綾杉文が1段あり、この上にもう1段綾杉文が施されていたと考えられます。また綾杉文の下に1条の沈線文が廻り、その下に1条の連弧文が施されます。胎土は長石の砂粒を含み、色調は外面橙色、内面黒灰色を呈します。

甕 (18) 甕底部です。底部は平底になっており、焼成前に斜めにしたためか底部端部約1/3がつぶれています。調整手法については内外ともに剥落が著しく不明、底径は7cmを測り、胎土は1mm~2mm大の石英・長石を多量に含み、色調は外面茶褐色、内面橙色を呈します。

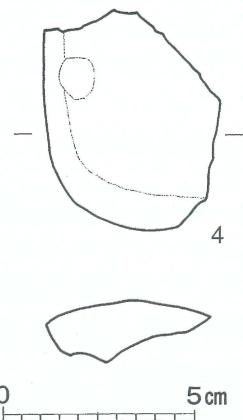
小型鉢 (19) 小型鉢底部です。口縁部を欠いて、底部は平底になっています。調整手法は外面は磨滅が進んでいますが、7本単位の刷毛目が強く施しています。内面も磨滅のため、正確にはわかりませんが、4本/6mmの複雑な刷毛目が施されています。底径は5cmを測り、胎土は1mm大の石英・長石を含みます。色調は外面橙色、内面茶褐色を呈し、焼成は良好です。

甕 (20) 甕底部です。底部は平底になっています。調整手法は外面に18本/30mmの刷毛目が強く施され、底部端部まで達しています。底径は6.7cmを測り、胎土は粗く石英等の砂粒を多く含みます。色調は茶褐色を呈します。

壺 (21) 壺底部です。約1/2の底部断片です。底部は凹む。調整方法は外面が刷毛目調整のうちに幅約7mmのヘラ状工具によって上から下へナデ調整を施され、表面がとても緻密になっています。所々に残る刷毛目は底部端部まで達し、8本/13mm施されています。内面はナデ調整が施され表面が緻密になっている。復元底径は9.7cmを測り、胎土は1mm大の石英を多少含み、色調は、黄白色を呈し、焼成は良好です。

#### 出土石器 (第7図)

磨製石斧 (4) 磨製石斧の破片資料です。玄武岩で斧の刃部以外を大きく欠きます。仕上げは非常に丁寧で、刃部に顕著な打裂痕はなく、あまり使用されなかったと考えられます。最大長5.7cm、最大幅4.6cm、厚さ1.6cm、現存重量40グラムを測ります。



#### 3号貯蔵穴 (図版6、第10図)

3号貯蔵穴は、調査区中央より北側に位置し、北側に2号貯蔵穴があり、南側で6号貯蔵穴と重複します。その先後関係は 3号(新)>6号(古)です。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面から緩やかに外傾して立ち上がり、上面に達します。大きさは上面で径1.7m、深さ1.26m、床面で長軸1.64m、短軸1.6mを測ります。

第7図 2号貯蔵穴出土石器実測図  
(S=1/2)

## 出土土器（第8図）

甕（22） 甕口縁部の小破片です。如意形口縁です。調整方法は口縁端部から下は刷毛目を施したのちに、ヨコナデ調整によって刷毛目を消してあり、一部刷毛目が残ったところでは、7本/8 mm 刷毛目が施されています。また口縁端部から下2.6cm の所に1条の沈線文が廻り、この沈線文の下から刷毛目調整が11本/10mm で強く施されています。内面はヨコナデ調整を施されています。胎土は精良で、石英・長石の砂粒を若干含みます。色調は外面茶褐色、内面黄白色を呈し、焼成は良好です。

鉢（23） 鉢口縁部の小破片です。口縁が直に立ち上がり、口縁端部は平坦です。調整手法は、外面がナデ調整を施され、内面も丁寧なナデ調整が施されています。胎土は0.5mm ~ 4 mm 大の砂粒を含みます。色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈します。

壺（24） 壺肩部の小破片です。上から下へ、下から上へと交互に斜線を左から右へと施された矢羽状の綾杉文をまず2段施し、その上にヘラ状工具によって肩部に1条の沈線文を入れることによって稜を出し、綾杉文の下に接するように2条の沈線文を施します。胎土は精良で石英・長石の砂粒を多少含みます。色調は外面に一部赤色顔料が付着し、その外は黄白色を呈します。

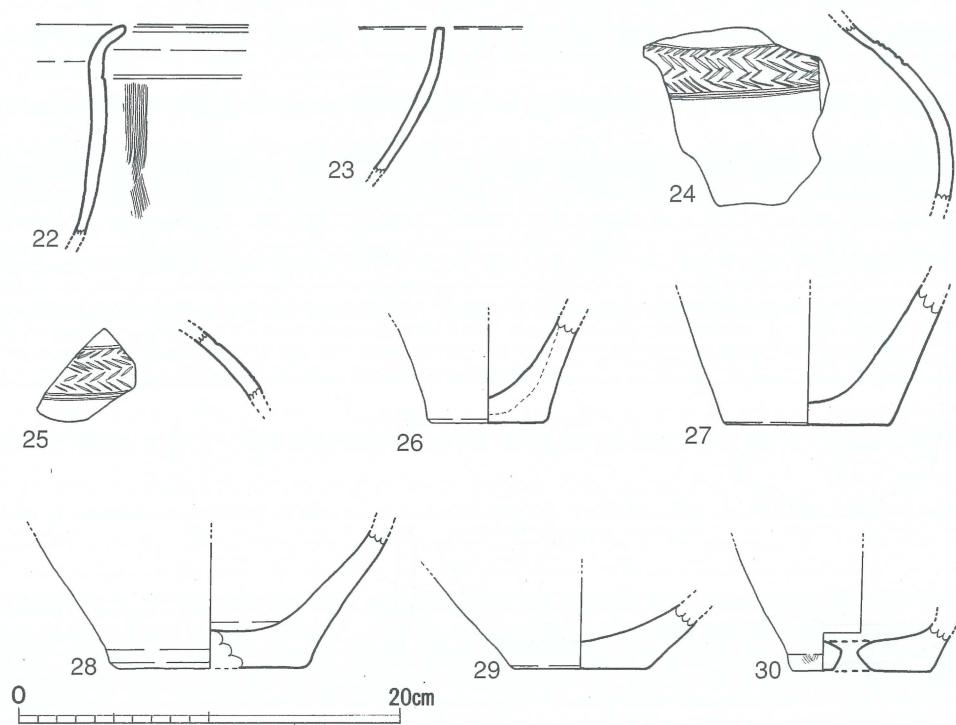
壺（25） 壺肩部の小破片です。上から下へ、下から上へと交互に斜線を左から右へと施された矢羽状の綾杉文をまず2段施し、その上にヘラ状工具によって肩部に1条の沈線文を入れることによって稜を出し、綾杉文の下に接するように2条の沈線文を施します。胎土は精良で石英・長石の砂粒を多少含む。色調は外面に一部赤色顔料が付着し、その外は黄白色を呈します。これは壺（24）の壺肩部と類似しており、同じ壺の破片とも考えられます。

甕（26） 約1/2 残す甕の底部断片です。底部は平底になっています。調整手法は、剥落のためによくわかりませんが、一部残っている所で7本/6 mm 刷毛目を施しています。また内面には、炭化物がべつとりと付着しており、土器断面では黒色土と赤褐色土の二層になっています。胎土は、赤褐色土は石英・長石の砂粒を多く含み、黒色土は石英の砂粒を含みます。復元底径は5.6cm を測り、色調は外面赤褐色、内面黒色を呈します。

甕（27） 約1/2 残す甕の底部断片です。底部は平底になっています。調整手法は剥落のためよくわかりませんが、一部残っている所で9本/14mm の刷毛目が入ります。復元底径は8.4cm を測り、胎土は粗く2 mm ~ 6 mm 大の石英・長石の粗粒を多く含み、色調は外面が赤褐色、内面が黄白色を呈します。

## 出土石器（第9図）

打製石斧（5） 打製石斧です。片岩系で周縁部に調整の為の敲打痕を顕著に残し、裏面下部に、調整のためと考えられます若干の研磨が施されています。最大長14.2cm、最大幅6.6cm、厚さ1.2cm、現存重量160 グラムを測ります。



第8図 3~4・7号貯蔵穴出土土器実測図 (S=1/4)

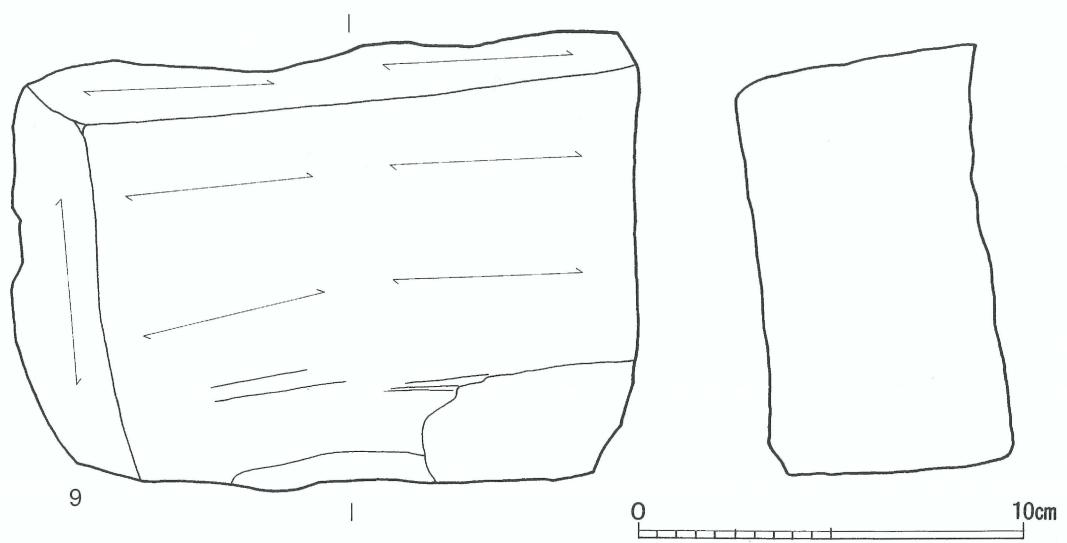
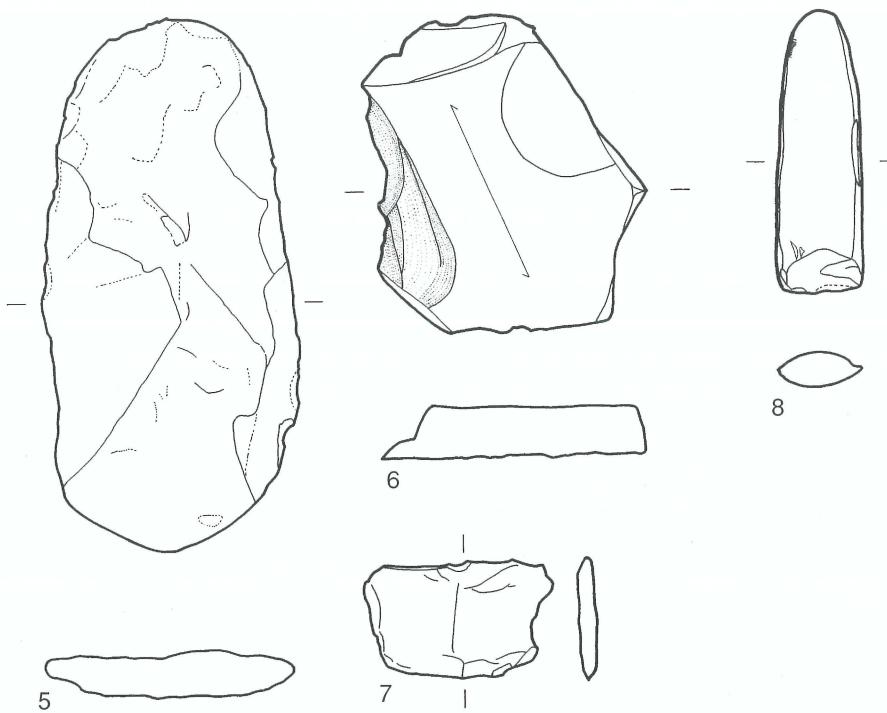
砥石 (6) 砥石です。粘板岩できめは細かく精砥です。図示した面に砥研の痕跡を顯著に残し、他にも側面2面が若干砥研の痕を残しています。最大長7.2cm、最大幅4.8cm、厚さ1.3cm、現存重量100グラムを測ります。

石包丁？ (7) これは形状から石包丁の未製品であると思われます。片岩系で周縁部に調整の為の敲打痕を顯著に残し刃部はシャープです。最大長4.8cm、最大幅2.9cm、厚さ5mm、現存重量11グラムを測ります。

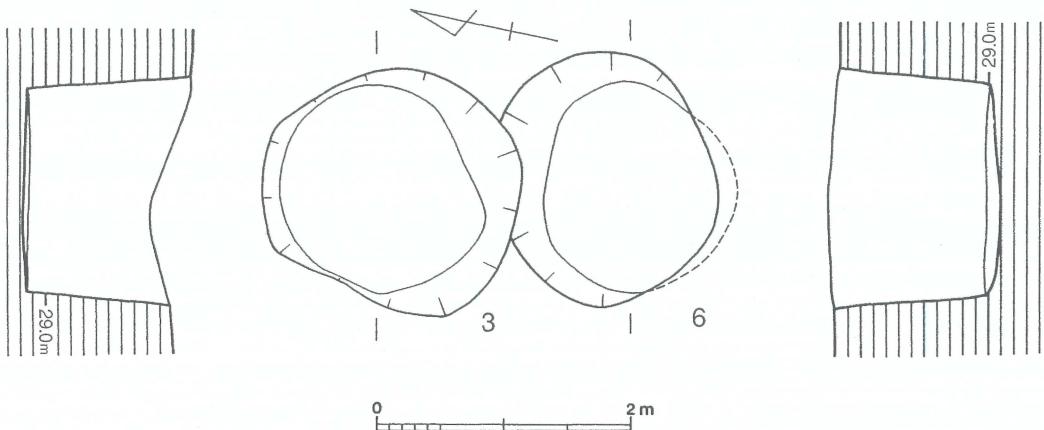
#### 4号貯蔵穴 (図版6、第3図)

4号貯蔵穴は、調査区中央に位置し、東側に5号貯蔵穴があります。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面から緩やかに内傾して立ち上がり、上面に達します。大きさは上面で径1.7m、深さ1.34m、床面で長軸1.88m、短軸1.66mを測ります。



第9図 3・4号貯蔵穴出土石器実測図 (S=1/2)



第10図 3・6号貯蔵穴実測図 (S=1/60)

#### 出土土器 (第8図)

甕 (28) 約1/3残す甕の底部断片です。底部は平底になっていて、調整手法は内外ともに剥落が著しく不明、復元底径は9.6cmを測り、胎土は石英・長石の砂粒を多く含みます。色調は外面橙色、内面黄白色を呈します。

甕 (29) 甕底部です。底部は平底になります。調整手法は内外ともに剥落が著しく不明です。底径は6.8cmを測り、胎土は石英・長石の砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈します。

#### 出土石器 (第9図)

石槍 (8) 石槍です。とてもなめらかな石で、全体を研磨して調整されていますが、表と裏の両面とも非常に丁寧に仕上げてあり側面も丁寧に磨き稜をつくっています。先端部には敲打痕は認められません。最大長7.5cm、最大幅2.2cm、厚さ1cm、現存重量30グラムを測ります。

砥石 (9) 砥石です。目の粗い砂岩で、荒砥石であると考えられます。全面にわたって使用されており、主に図示している面を使用していますが、時には側面を使い、また裏面には7~4mmの4条の細い溝があり、刃部を研磨したときについたものと考えられます。最大長14.2cm、最大幅10cm、厚さ6cm、現存重量2.22kgを測ります。

#### 5号貯蔵穴 (図版7、第2図)

5号貯蔵穴は、調査区中央より東側に位置し、南側で2号石棺墓と重複します。その先後関係は2号石棺墓(新)>5号貯蔵穴(古)です。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面からやや直立気味に立ち上がり、上面に達します。大きさは上面で径1.4m、深さ1.14m、床面で径0.9mを測ります。

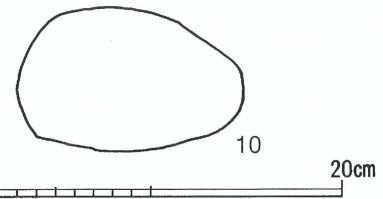
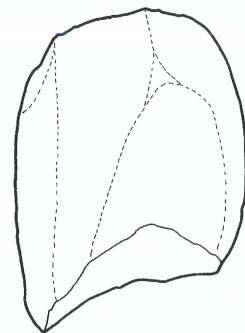
## 6号貯蔵穴（図版6、第10図）

6号貯蔵穴は、調査区中央より北側に位置し、北側に3号貯蔵穴と重複し、南側に5号貯蔵穴があります。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面から緩やかに外傾して立ち上がり、上面に達します。大きさは上面で径2m、深さ1.34m、床面で長軸1.68m、短軸1.5mを測ります。

## 出土石器（第11図）

たたき石（10）たたき石の破片資料です。石材は石英で手に納まりやすい形をしています。先端部に敲打痕が残り、敲く機能が主だったと考えられます。最大長6.9cm、最大幅6.2cm、厚さ3.8cm、現存重量280グラムを測ります。



## 7号貯蔵穴（第3図）

7号貯蔵穴は、調査区最も北側に位置し、南側に1号貯蔵穴があります。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面からやや直立気味に外傾して立ち上がり、上面に達します。大きさは他の貯蔵穴と比べ最も小さく、上面で径1.2m、深さ0.5m、床面で径0.9mを測ります。

## 出土土器（第8図）

甌（30）甌底部です。底部は平底になっており、底部中央に開いている穴は、焼成後に開けたものと思われます。調整手法は、外面は5本/5mmの刷毛目が施していますが、磨滅のためによくわからなくなっています。内面は剥落のため不明です。底径は7.1cmを測り、胎土は石英・長石の砂粒を含み、色調は黄白色を呈します。

第11図 6号貯蔵穴出土石器実測図  
(S=1/2)

## 8号貯蔵穴（第3図）

8号貯蔵穴は、調査区中央より南側に位置し、南側に10号貯蔵穴があります。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面からやや直立気味に外傾して立ち上がり、上面に達します。大きさは上面で径1.84m、深さ1.46m、床面で径1.68mを測ります。

## 9号貯蔵穴（第2図）

9号貯蔵穴は、調査区中央より南側に位置し、西側に8号貯蔵穴があります。南側に向かっ

て溝状の窪みが走ります。

この遺構の床面は橢円形を呈し、床面から緩やかに外傾して立ち上がり、上面に達します。大きさは上面で長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.7mを測ります。

### 10号貯蔵穴（第2図）

10号貯蔵穴は、調査区中央より南側に位置し、北側に8号貯蔵穴があります。この貯蔵穴は西側が調査区域外に伸びています。

この遺構の床面は橢円形を呈し、床面からやや直立気味に外傾して立ち上がり、上面に達します。大きさは上面で長軸1.4m、深さ0.17mを測ります。

## 2 ピット

調査区内には建物に伴うようなピットの確認はありませんでした。

## 第3節 古墳時代の遺構と遺物

### 1 石棺墓

#### 1号石棺墓

この石棺墓は、発掘調査の端初を作ったもので、貯蔵穴群の比例、一段下がったところにあります。調査後保存されたため、石棺の掘り方の断面図は完成していません。また、調査担当者の不注意から実測図を消失したため、調査メモにより、その大きさなどを記します。

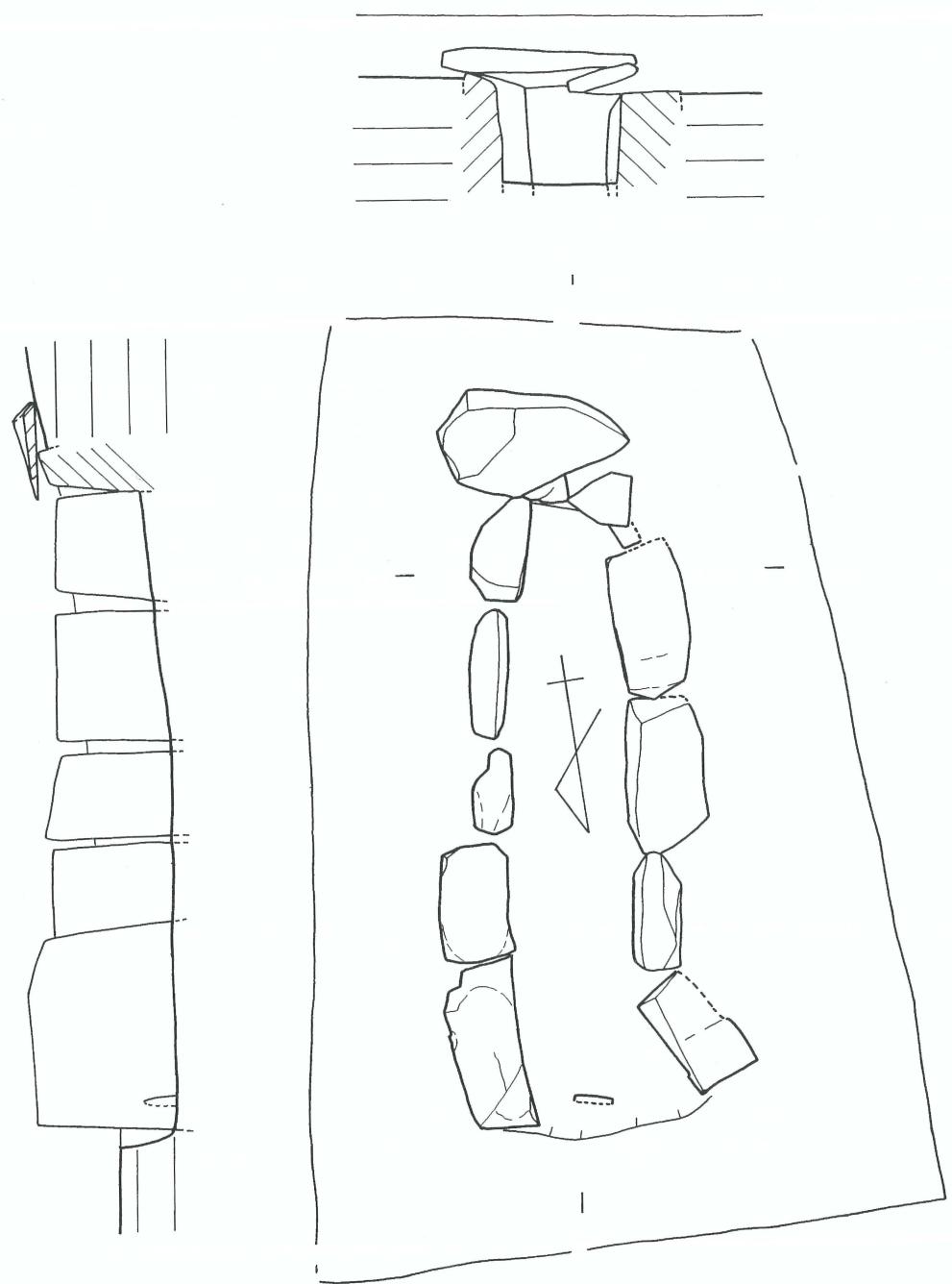
墓壙は第三紀層にある珪花木群を掘り抜いたぎりぎりに石棺を設置しているため、そのプランは不整台形を呈し、長さ2.33m、上辺0.56m、下辺0.83mを測ります。

石棺は既に盗掘を受けており、蓋石は存在していませんでした。側壁は、東側に4枚、西側に4枚を使用し、小口部は外側に1枚ずつ配置すると思われます。しかし、東側側壁の2枚及び西側側壁1枚は消失し、また小口部の北側も消失しています。床面はほぼ水平です。小口部幅は北側0.34m、南側0.43mを測り、頭位は南側と考えられます。長さは床面で2.12mを測ります。石材は、すべて玄武岩で、内面等に朱などの塗布は見られませんでした。

#### 2号石棺墓（第2、12図）

この石棺墓は、調査後保存されたため、石棺の掘り方の断面図は完成していない。先述したように5号貯蔵穴を切っています。

墓壙プランは不整台形を呈し、長さ2.57m、上辺1.08m、1.72mを測り、そのほぼ中心に石棺を設置しています。



第12図 2号石棺墓実測図 ( $S=1/20$ )

石棺は既に盜掘を受けており、蓋石は存在していませんでした。側壁は、東側に5枚、西側に5枚を使用し、小口部は外側に1枚ずつ配置すると思われます。しかし、西側側壁の南北両端の2枚は原位置を保たず、また小口部の南側も原位置を保っておらず、さらに北側は消失しています。

床面は北側で標高31.29m、南側で標高31.38mを測り、北側に向かって低くなります。小口部幅は北側0.34m、南側0.24を測り、頭位は北側と考えられます。

長さは床面で1.74mを測ります。石材は、すべて玄武岩で、内面等に朱などの塗布は見られませんでした。

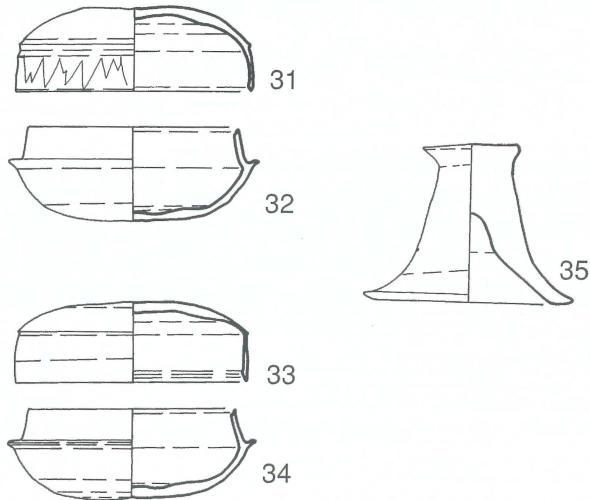
## 2 ピット

調査区内では、建物に伴うようなピットの確認はありませんでした。

### 表採資料（第13図）

須恵器杯蓋(31) 杯蓋です。完形品で、天井部は丸みを有し肩部に鋭い稜が廻ります。また口縁部は若干内湾気味になっています。調整方法は内外ともに回転ヘラケズリによる調整で、ろくろの回転方向は反時計回りです。肩部の稜線と口縁端部の間に山型のヘラ記号があり、このヘラ記号を書くときに肩部の稜に指をかけたと思われ、ヘラ記号の上の稜7.8cmが乱れています。法量は、口径12.2cm、器高4.4cmを測り、色調は灰白色を呈します。胎土には7mm～1mmの大の石英の粗粒が含まれ、焼成は良好です。

須恵器杯身(32) 杯身です。底部は回転ヘラケズリによって丸く整形され、受部は短く上外方にのびており、端部は丸く端部上端に面を持ちます。立ち上がりは1.9cmでやや内傾して上方にのび、端部には明瞭な段を持ちます。内面底部には指押し後、一方方向ナデ調整を施しており、ろくろの回転方向は反時計回りです。底部上端から受部までの2cmの間にヘラ状工具によって底部上端から受部に向かって6本/35mmのヘラ記号が施してあり、(31)の杯蓋のヘラ記号の書き方が類似し、また受部径と口径がほぼ一致しているため(31)とセット関係にあると推定されます。法量は口径10.9cm、推定杯蓋口径12.1cm、最大径13cm、器高5cmを測



第13図 表採資料実測図 (S=1/4)

り、色調は灰白色を呈し、胎土は石英の砂粒を含み、焼成は良好です。

須恵器杯蓋（33） 杯蓋です。天井部は丸みを有し、肩部に鋭い稜が廻ります。肩部から口縁端部にかけてはほぼ垂直にのびており、内面の口縁端部に稜を持ちます。天井部にはヘラ記号が施してあります。内外ともに回転ヘラケズリ調整が施され、ろくろの回転方向は、反時計回りです。法量は、口径12.1cm、器高4.3cmを測り、色調は外面灰白色一部黒色、内面青灰色を呈し、胎土は石英の砂粒を含み、焼成は良好です。

須恵器杯身（34） 杯身です。底部は回転ヘラケズリによって丸く整形され、受部は短く上外方にのびており端部は丸く、端部上端に面を持ちます。立ち上がりは1.7cmでやや内傾して上方にのび、端部には明瞭な段を持つ。内外共に回転ヘラケズリを施され、ろくろの回転方向は、反時計回りです。法量は口径10.7cm、推定杯蓋口径12cm、最大径12.9cm、器高4.7cmを測り、色調は灰白色を呈します。胎土は、石英の砂粒を含み、焼成は良好です。

土師器高杯（35） 高杯です。脚部しか残っていません。調整手法は、外面は剥落のため不明ですが、脚部内面に指押し痕が残ります。裾部端部は若干跳ね上がります。脚裾径は11cmを測り、胎土は緻密でほとんど砂粒を含みません。色調は赤茶色を呈します。

### 第3章 まとめ

以上説明してきたように、神崎遺跡では、弥生時代前期末から中期初頭の貯蔵穴10基と古墳時代前期の石棺墓2基を検出しました。

遺跡は丘陵突端部にあり、中元寺川と彦山川の流域に発達した田園地帯を見おろす位置にあります。この周辺では、以前町営住宅建設時に多数の石棺が出てきたそうです。また、北側の丘陵では、しがみかんとう 獅臘環頭（表紙）が出土した古墳があったと伝えられています。

今後の調査で、新たな金田の歴史がひもとかれることが期待されます。

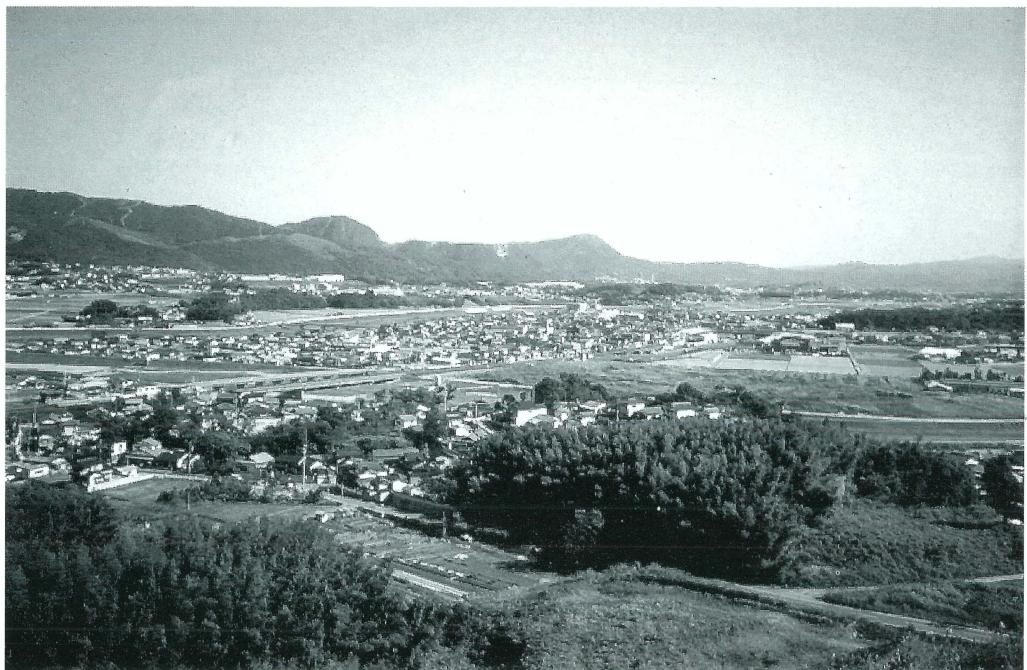


1 神崎遺跡全景

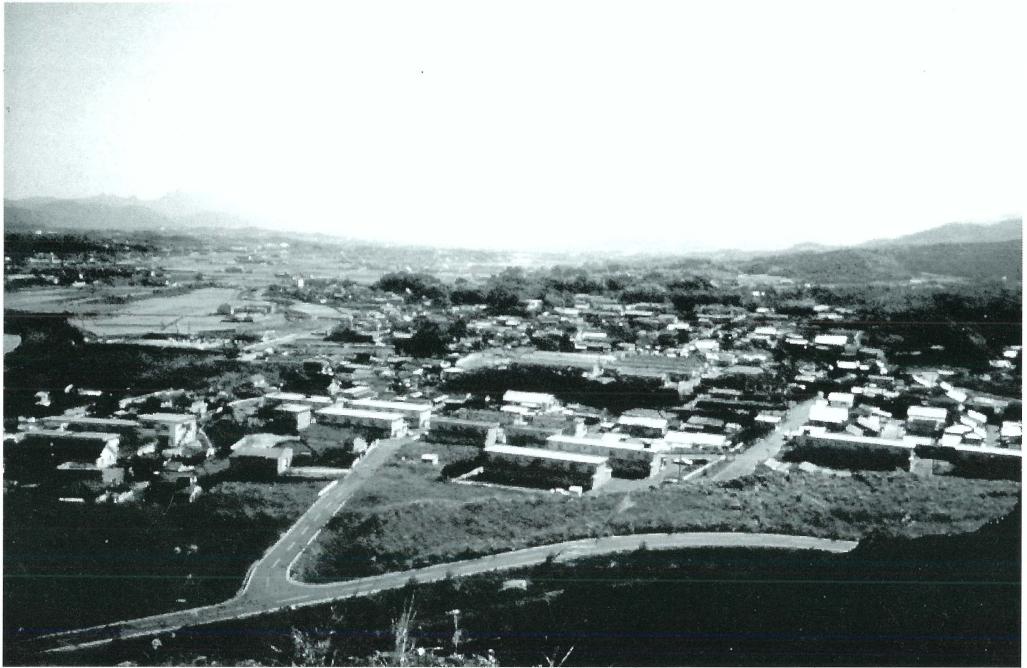


2 神崎遺跡全景

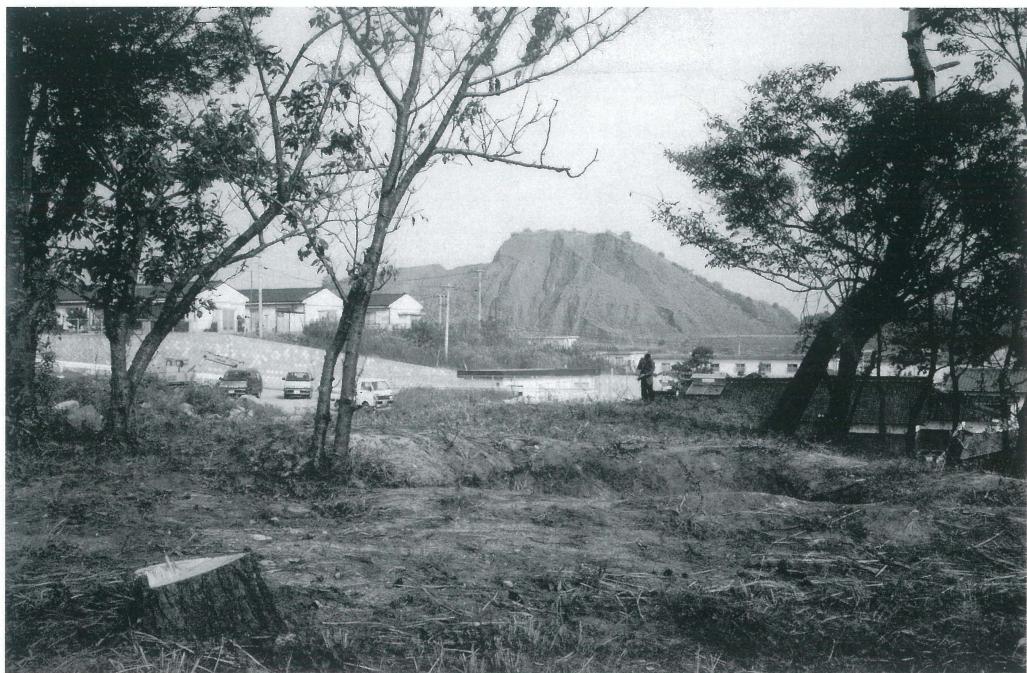
## 図版2



1 香春岳を望む（石灰岩採石のため削平が著しい）



2 金田町を望む（彦山川と中元寺川の両岸に田園地帯が広がる）



1 調査前の神崎遺跡（南から）

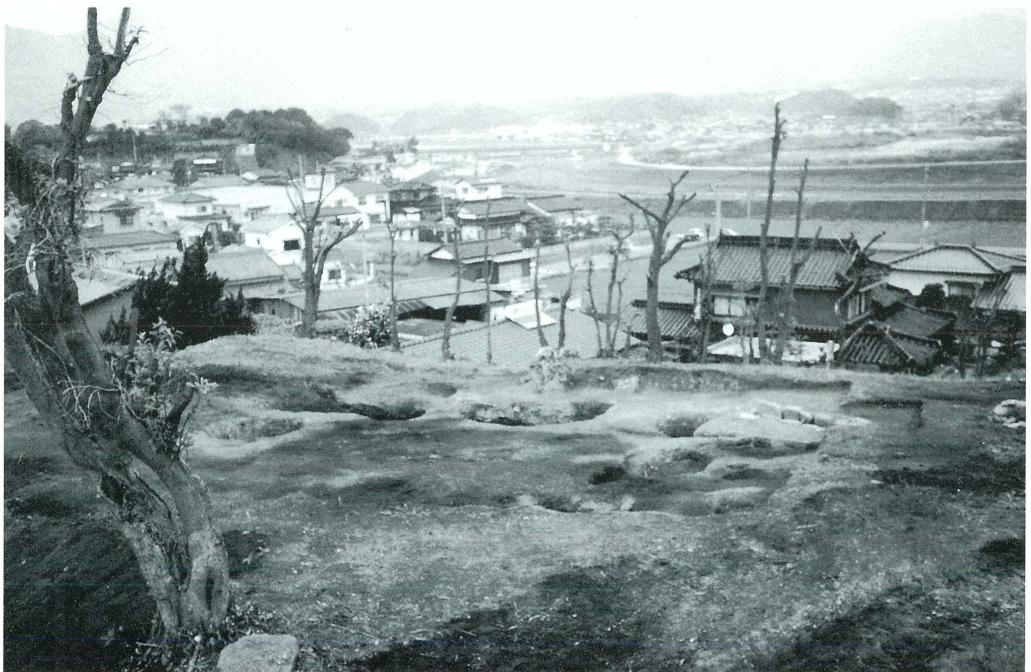


2 調査前の神崎遺跡（北から）

図版4



1 調査後の神崎遺跡



2 調査後の神崎遺跡



1 調査後の神崎遺跡

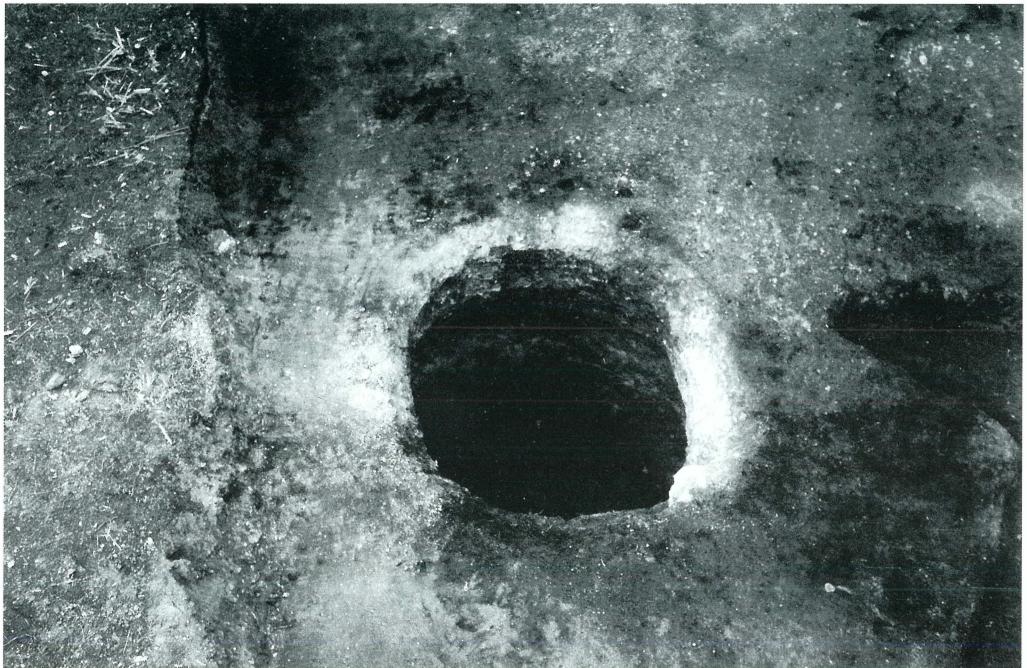


2 1号貯蔵穴

図版6



1 2~3号、6号貯蔵穴（手前から）



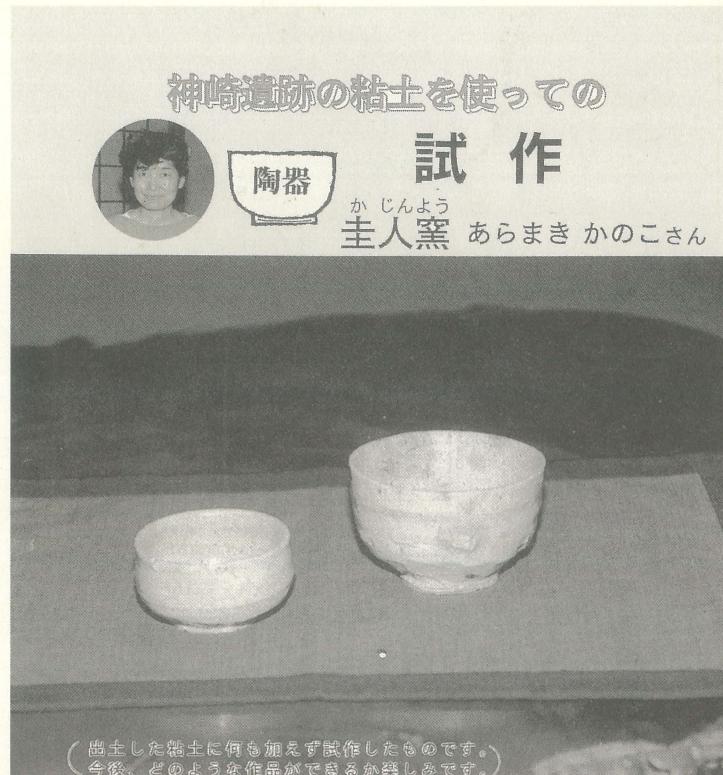
2 4号貯蔵穴



1 2号石棺墓 (5号貯蔵穴を切る)



2 作業に参加したみなさん



金田町広報「カナダ」(No.258号、1993.1.1)に掲載されました。

## 神 崎 遺 跡

金田町文化財調査報告書

第 1 集

1994年3月31日

発 行 金田町教育委員会  
福岡県田川郡金田町

印 刷 隆文堂印刷(株)  
北九州市門司区畠田町1番1号